

【10】

| | |
|---------|-------------------------|
| 氏名(本籍) | 竹花正剛 (大阪府) |
| 学位の種類 | 教育学博士 |
| 学位記番号 | 博甲第208号 |
| 学位授与年月日 | 昭和59年3月24日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第5条第1項該当 |
| 審査研究科 | 心身障害学研究所 心身障害学専攻 |
| 学位論文題目 | 知能障害児の弁別移行学習における転移効果の研究 |
| 主査 | 筑波大学教授 教育学博士 小林重雄 |
| 副査 | 筑波大学助教授 井田範美 |
| 副査 | 筑波大学助教授 保健学博士 池田由紀江 |
| 副査 | 筑波大学助教授 教育学博士 太田信夫 |
| 副査 | 筑波大学助教授 渡辺光雄 |
| 副査 | 筑波大学助教授 教育学博士 市村操一 |

論 文 の 要 旨

(1) 本論文の構成

本論文は全7章およびあとがきならびに文献から構成されている。

(2) 研究の目的

精神遅滞児および自閉症児を含む知能障害児の治療・学習訓練において、彼らの学習面、行動面のつまずきを早期に発見し、援助し、修正していくことは大切なことである。特に彼らの学習面の問題に焦点をあてた場合プログラムの導入および展開において、課題の適切な要素への選択的注意を高め、学習の転移を促すための条件を分析することが重要である。学習が容易にかつ効率よく進むのに影響すると思われる要因の分析にもっとも適しているのが弁別移行課題といえる。

この研究は弁別学習を促進する条件について、注意と学習の転移課程との関連で検討し、治療教育への適用のための基礎的資料を得ようとするものである。精神遅滞児と自閉症児ではオバートな行動特徴はかなり異ってはいるが、ともに適切な刺激要素への注目過程に問題を持ち、複数の刺激要素に注目して処理する過程に困難性を示している。

この研究では一貫して弁別移行学習課題を用いて、注意と学習の転移の問題に関して、large-Nおよびsmall-Nアプローチにより検討を加える。

(3) 実験とその結果・考察

① 第1実験系列

第1実験系列では、非逆転移行課題（異った次元間の移行；先行学習と移行学習では価が同一）を用いて、注意反応の転移と注意説の妥当性に関して検討を加えた。実験1では、先行訓練量の変化に伴う転移の効果について、刺激配置条件との関連で検討を加えた。実験2では被験児条件（精神遅滞児、自閉症児および普通児）と先行訓練との関連で、実験3では先行適切次元への注意反応を操作的に高める手続きとしてcomponent訓練を導入して、学習の転移の効果について検討を加えた。その結果、精神遅滞児は相対的に対象—報酬関係に基づいた学習傾向が強いがcomponent訓練を導入することにより、次元性の反応（適切次元に対する注意反応）を高めることが示された。一方、自閉症児は普通児ほど顕著ではないが、過剰訓練により注意反応の転移の効果が認められ、次元—報酬関係に基づいた学習を示した。

これらの結果は先行訓練により先行適切次元に対する注意反応が高められ移行事態へ転移することが示されたことになり、注意説の妥当性をほぼ支持する結果を得たといえる。

② 第2実験系列

第2実験系列では、次元外移行課題（異った次元間の移行；先行学習と移行学習では価が異なる）を用いて、学習を困難にしている要因を分析し、そうした要因による学習妨害効果を低減する手続きを見出すことを目的とした。そして、不適切な刺激要素から適切な刺激要素への注意反応を迅速かつ円滑にスイッチするための条件について検討している。

実験4では個体内要因と次元の優位性、または弁別容易性との関連で、実験5では優位な次元への移行学習における転移の影響について、実験6では不適切次元数の操作との関連で検討が加えられた。

その結果、形次元の優位性が示され（実験4）、移行事態において、形が適切次元となるとき、注意反応のスイッチがスムーズに行なわれ（実験5）、形が不適切次元であるとき、逆にスイッチが遅れること（実験6）が示された。さらに、過剰訓練により学習の妨害効果（負の転移）が認められた。不適切次元を除去したり（実験6）、適切次元を付加したり（実験7）することにより、学習を円滑にかつ容易に遂行できることが示された。

これらの結果は治療・学習訓練場面での課題の呈示、配列、展開における基礎資料を提供したことになるといえよう。

③ 第3実験系列

第3実験系列では、単一刺激要素学習から複合刺激要素学習への移行学習であるcomponent移行課題を用いて、刺激の選択過程の検討と複数の刺激要素への反応の形成過程を分析した。

実験8（MA3歳～5歳）と実験9（MA4歳～5歳）では精神遅滞児についてlarge—Nアプローチにより検討し、実験10では、就学前の自閉症児、精神遅滞児および学習障害児についてsmall—Nアプローチにより検討している。

その結果、年少児ほどone—look的な反応を示し、年長児になるほどmultiple—look的な反応

が強くなることが示された(実験8)。MA4歳およびMA5歳の精神遅滞児は、正刺激反応型および偶然水準反応型の比率が普通児よりも高い値を示した。

このcomponent課題を22名の臨床例に適用したものが実験10である。症例児の2/3が複合刺激要素への移行学習を遂行し、学習未成立者のうち6割は先行正刺激への反応を示した。症例児を群別(障害別, MA別, IQ別)に分類して検討した結果, 刺激選択得点(単一の刺激要素への選択性)は自閉症児群が高く, 続いて精神遅滞児群, 学習障害児群の順となった。MAの増大に伴って, 刺激選択得点の減少が示された。正反応率の分析から, 形への優位傾向が認められた。反応パターンに関して, 精神遅滞児群, 自閉症児群, 学習障害児群の順にS-R連合反応からone-look反応, 更にmultiple-look反応への移行を示した。この反応型の変化はMAの増加とも対応していることも明らかとされた。

普通児群, 精神遅滞児群, 症例児の資料から, 注意の幅はMAの要因による影響を受け, 発達水準の増加に伴い, multiple-look型反応へと移行することが示唆された。また, 訓練によってもこの移行が促進されることが示され, 注意の幅は固定的なものというよりも, ある程度までは学習訓練により変容しうるものであることが指摘された。

審 査 の 要 旨

精神遅滞児, 自閉症児を対象として, 先ず先行の弁別学習を行ない, 続いて非逆転移行および次元移行事態を導入して, 後続の弁別学習に負の効果, すなわち負の転移がどの程度生じるのか, またそれを減じるための条件は何かを明らかにした。

この研究は知能障害児の治療教育にあってもっとも頻繁に用いられる弁別学習をとりあげ, そこで課題の展開において問題となっている次の学習への先行学習の妨害効果を克服するための基礎的資料を得ようとしたものである。こうした観点からの組織的な研究はこれまでおこなわれていないものであり, 高く評価できる。

本研究では対象とした被験児の精神年齢の幅が比較的狭少であること, 各実験系列での実験数(条件数)が必ずしも十分でないことなど問題が残る。

しかしながら, 弁別学習を軸として系統的に実験を展開しており, 治療教育への基礎研究の資料の適用の可能性を示したという点で知能障害児の学習実験および知能障害児教育の面での貢献が大であると判断される。

よって, 著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。